優秀賞

ぼくが変わった夏休み

岡山県　中庄小学校　六年
松本　一楓

夏休みに入ってから、ぼくはめっきり外で遊ばなくなった。最初は、「1 日中涼しい部屋で過ごせるなんてラッキー」と思っていたけれど、数日経つと身体を動かしたくてウズウズしていた。

ある日お母さんが、

「朝なら涼しいし、ジョギングしたら。」

と提案してくれたことがきっかけで、ぼくは早起きをしてジョギングを始めた。朝から走る人なんていないだろうと思っていたら、意外と人とすれちがい、「おはよう」とあいさつをされることが多くなった。

ただのあいさつだけれど、あいさつをされると気分が良くなって、足が軽くなったような気がしてうれしくなった。朝ジョギングをしなければ、こんな体験はできなかった。

ジョギングから帰ると、必ずお母さんが、

「おかえり。暑かったでしょ。」

とむかえてくれる。ぼくは、それもうれしくてジョギングを続けていた。それに加えて、お母さんがおいしい朝ごはんを用意してくれていることも楽しみだった。

ある朝、いつものように早起きして走ろうとしたら、お母さんは仕事が休みでまだ眠っていた。ぼくは、たまにはゆっくりねてほしいと思ったので、お母さんを起こさないように静かに玄関を出た。帰ってきたらお母さんが、

「ごめん、ねすごした。」と謝っていたけれど、ねすごしたんじゃなく、ぼくがねていてほしかったんだ、と伝えた。

ふと、ぼくはどうしてお母さんにゆっくりねていてほしいと思ったのかを考えた。それは、お母さんがいつもぼくを優先してくれているからだった。ジョギングの前の夜には洗たくをして、朝早く起きてごはんを作って待っていてくれる。ふだんなら、当たり前に思ってしまっていたが、ぼくにそれができるかと考えると難しい、いやできないと思う。自分にできないことをしてくれているからこそ、何かお返しがしたいと考えたんだと思う。

親切について考えたとき、人に親切にしましょう、とよく聞く。他人に優しくするという意味もあるけれど、「親しい人こそ大切にしよう」という意味での「親切」もあったらすてきだなと思った。

ぼくとすれ違っただけであいさつをしてくれた人たち、ぼくのためにいろいろしてくれるお母さん、気づけばみんなが親切にしてくれていた。夏休みがなかったら、朝ジョギングに行かなかったら、きっと気づかなかったことがたくさんだ。ぼくもいろいろな人に、親切でお返しがしたいと思えるようになっていた。

今日も誰かに親切にできたらいいな。そんなことを考えながら、ぼくは今日も早起きをする。